

鹿沼の自然・栃木の旅

月報第7号

(2012年11月)



～牧野富太郎生誕150年～

北光クラブ
自然観察クラブ

「山岳」第一年第二号(明治39年6月・山岳会)より

牧野富太郎の著書には『牧野日本植物図鑑』を始めとした図鑑、図譜、検索表、自叙伝、植物採集や標本製作法等の他に、植物に関する随筆が数多くある。牧野は植物の標本を集めるために、国内各地の山にも出掛けていたはずで、もしこの時代にそれぞれの植物採集行について紀行を書いていたら、近代日本登山史上、重要な文献、山岳書の名著になっていたはずである。残念ながら、数多くの随筆の中に紀行らしいものは見当たらない。『随筆草木志』(昭和11年)の中に「富士登山と植物」という一文が見られるが、富士山と植物に関する文章で終わっていて紀行文にはなっていない。

ところが日本山岳会の機関誌「山岳」の中に唯一牧野富太郎の文章があった。もちろん紀行文である。なぜ牧野が書いたこともない紀行を書くことになったのか。

農学士川上瀧彌が利尻山に籠って採集した結果を牧野が主宰する植物学雑誌に発表したのを読んでから、牧野は折があれば自分もこの山に採集に出かけたかと思っていたが機会に恵まれなかった。ところが「山岳会」の会員で、高山植物に熱心な加藤泰秋子爵がこの山の採集を思い立ったという話を聞き、牧野はぜひ同行したいと考えた。子爵もその当時は高山植物についての知識が充分でなかったこともあり、同行者を探しているところであった。こうして牧野の希望はかなえられることになった。しかし、その約束の条件として、牧野はこの採集の紀行を書くことを引き受ける。こうして日本山岳会の機関誌「山岳」第一年第二号に牧野の書いた紀行文が残ることになったのである。

なお本文は、近藤信行編『山の旅 明治・大正篇』(岩波文庫)に全文が掲載されている。興味のある方、ぜひご一読いただきたい。



「利尻山と其植物」より

…絶頂に達すると、木造の小さな祠があるが、確か不動尊を祀ってあると云う話してあった。絶頂は別段平地がある訳でもなく、又此辺には樹は生えて居なくて皆草計りである。草は少ない方ではないと云って宜しかろう。此辺に、タカネオウギの自生して居るのを見た。絶頂から少し向うへ下る所まで、木下君と同行したが、此所でとうとう同君と分れて、自分は一人となった。其辺にリシリオウギ、ヒメハナワラビ、ミヤマハナワラビなどが生えて居る。

此絶頂に立って眺むると云うと、東北の方に当っては、宗谷湾が明かに見ることが出来て、白雲が其辺から南の方に棚引いて、広き線を引いて居って、幽かに天覧の国の山々を見ることが出来た。西の方は礼文島を鮮かに見ることが出来て、其外には所謂日本海で何にも眼に遮ぎるものはなく、唯時々雲の動くのを見る計りである。それから今は日本の領地となったのであるが、樺太の方は、此時朦朧として、何れが山であるか雲であるかを見分ることも出来ない有様であった。最も愉快であったのは、夕日が西に廻るに従って、利尻山の影が東の海上にありありと映って、富士山でよく人の見ると云う、影富士と同様のものを、此北海の波上に見ることが出来たのである。尚それよりも愉快であったのは、午後4時頃であったと思う、此利尻山の絶頂に於て、所謂御来光を見ることが出来た、即ち自分の姿が判然と自分の前を顕われるのを見ることが出来たのである。

絶頂より尚前面を見れば第2の峰が聳えて居るのであるが、時間が無くなったので此日は第2の峰に行かずして、前夜の露营地まで戻ることになった。今日は随分採集したのであるからして、其始末をするに、多くの時間を費して、終に徹夜をするような有様になった。乍併、前夜に比すれば、防寒具なども人足等が携え来ったのであるから、大いに寒気を凌ぐことが出来た。

12日の日も幸いにして晴天であった。午前3時頃露営の小屋を出でて仰ぎ見れば孤月高く天半に懸って、利尻山の絶頂は突兀として月下に聳えて居る。此間の風物は何んとも言いやうのない有様である。3時頃からして東の方が漸く明

(次ページへ続く)

るくなって、4時半には太陽が地平線に出た。此時西北の方を仰ぎ見ると、昨日は多少雲もあったが、今日は更に1点の浮雲もないので、礼文の方は益々鮮かに見ることが出来た上に、宗谷の方も東に無論見ゆるし、東北の方に1つの小さな島を見ることが出来た。此島は無論樺太に属するものである。朝の食事を終ってから再び絶頂に進んで、それから尚第2の峰に向って足を進めたが、其間は僅かに3、4町に過ぎないと云っても宜しいであろう。勿論足場はよくないけれ共、無論第1の峰程の困難はないのである。第2の峰には余り石などはないのであるが、自生して居る草は、チシマラッキョウ、エゾヨツバシオガマ、ホソバオウタデ、リシリソウなどで、殊にキバナノジャクナゲが甚だ夥しく自生して居た。第2峰の先きに第3の峰があるが、此峰に行くのは甚だ困難で、中間に絶壁の殆んど足場の得難いものがあるので、残念ながら全く断念することの止を得ないのを認めた。第2峰から西の斜面に降ったところに、蠟燭岩と云う大きな岩がある。岩の上にはタカネツメクサやらコイワレンゲなどが生じて居て、又其岩の下には、チシマイワブキやら、エゾコザクラの花のあるのなどが生じて居た。此辺は雪が消えて間もないような模様であったが、併し残雪は認めなかった。

(中略)

余の記憶に残って居るのはこんなことであって、誠に紀行とも言えないし、採集記とも勿論言えない位であるから、若し詳しいことを知りたいと云う方は植物学雑誌に出て居る、川上君の『利尻島に於ける植物分布の状態』と云う論文を御覧になれば、山の模様から植物の分布の有様も一層明かになるであろうと思う。併し兎に角前にも言った通り、登山の紀行を書かなければならぬと云う事になって居るのであるから、申訳ながらせめて御話だけでもして、自分の責を塞ぐ積りである。どうか其お積りで読んで頂きたい。

※ 文中の表記は読みやすさを考えて適宜直してあります。



奥日光、西ノ湖・千手ヶ原・高山ハイキング
～ミズナラ・ハルニシ等の巨樹を訪ねて～
10月14日（日） 天気・晴れ

那須で紅葉が見頃とのニュースに、奥日光もと期待して出かけたのですが、竜頭の滝沿いの溪谷の他は、ツタウルシや一部のカエデの鮮やかな赤を除けば、まだ山々の緑も濃く、見事な紅葉には早かったようです。山歩きの好きな親子を中心に30名の大部隊となり、まず西ノ湖から中禅寺湖畔の千手ヶ浜まで原生林を賑やかに歩きました。昼食後、湖畔を熊窪まで歩いて高山への登山にかかりましたが、途中の峠で、体力などの都合で小田代ヶ原を目指して降りていくグループと二手に分かれ、健脚グループは視界が開けて気持ちの良い針葉樹林の斜面を登って山頂にたどり着きました。眼下に中禅寺湖が見下ろせる絶景ポイントです。山を下りて先着グループと合流し、竜頭の滝の紅葉を見物して帰途に着きました。

道中、頭上の紅葉よりも、道端に実に様々のキノコを見つけ、自然の造形の妙、生命の不思議など感じた旅でした。 (北光クラブニュースNo.119掲載)

“隊長”より

今回のハイキングでは、初めての参加であるにもかかわらず、車を出していただいたり、子どもたちの先導をされたりと、いろいろご協力いただきありがとうございました。

これほどの標高でありながら、キイロスズメバチらしい使用中のハチの巣があったり、毒虫（ツチハンミョウ）に会ったり、熊さんの落とし物に遭遇したり、父親の真似をして山を駆け下り（言語道断であるが）捻挫した子どももいたり、山は危険がいっぱいだ、という思いをされた方も多いことでしょう。それでも、それ以上の楽しい思い出を残すことができたのでは、と思っています。

次回は、できれば運動靴よりも足首を覆うことのできる、深さのある軽登山靴等を用意し、登りは少し緩め、そして下山の時は少しきつめに締めて、足首を固定するようになれば安全かと思います。

※ 参加者

亀山義宗、佐々木伸二・千洋・真澄・茂・理恵、鈴木若菜・康之、
 中荒井匠・李華・章子、中田啓介・正子、中西さん一家4名、平井亜湖、
 茂呂さん親子、和田さん親子、小島美穂、山口龍治、石崎隆史・裕子・理絵、
 阿部瑞穂・良司・みゆき（計30名）

※ 見つけたキノコ

キシメジ科	サクラタケ（毒）	ヒラタケ科	シイタケ
	カヤタケ（食）		ウスヒラタケ
	ウラムラサキ（食）		（共に食用）
ウラベニガサ科	ウラベニガサ（食）	ベニタケ科	キチチタケ（食）
ハラタケ科	ナカグロモリノカサ（毒）		ケショウハツ
ヒトヨタケ科	センボンズタケ	タコウキン科（サルノシカケ科ともいう）	
オキナタケ科	バフンタケ		アシグロタケ
モエギタケ科	クリタケ		マスタケ（食）
	ヌメリスギタケ		ツリガネタケ
	ヌメリスギタケモドキ		オツネンタケモドキ
	スギタケ（すべて食用）		チャカイガラタケ
フウセンタケ科	ニセトガリフウセンタケ（毒）	コウボウフデ科	クチベニタケ
	ニセアセタケ（毒）	ホコリタケ科	キツネノチャブクロ
イグチ科	ハナイグチ（食）		（ホコリタケ）
	カラマツベニハナイグチ		
	クロアワタケ		
	ドクヤマドリ（毒）		



ヌメリスギタケ



西ノ湖畔にて全員集合

山口さんの自然講座・2

秋の奥日光ハイキングで見たきのこ

きのこについて書くのは初めてなので、その位置付けから進めていきましょう。今ではきのこは菌類ということはよく知られていますが、昔の人達はきのこからいろんな樹木に育つと思っていました。それで「木の子」と呼びました。英名はマッシュルームです。

きのこを作る菌が本当の菌というので真菌、きのこを作らない菌は細長い細胞なので細菌の2つに大きく分けられました。呼び名は違いますがカビも菌類です。きのこは樹木と密接な関係を持つものが多く、木の種類の違いにより、その山に生えるきのこが予想できます。

この日はきのこが多く、2人の女の子が次々にいろんなきのこを見つけて持ってきてくれました。その1つにホテイシメジと言ったのですが、のちにカヤタケと訂正しました。この2種は互によく似たものがあります。どちらも食べられますが、ホテイシメジは一癖あって、アルコールの分解を妨げる成分があり(アセトアルデヒドという)、少しのお酒でも気分が悪くなり、悪酔い状態になります。カヤタケは毒キノコのヒダハタケやドクササコにもよく似ています。

食用きのこには、みんなそれによく似た毒きのこがいくつかあります。食べるのが目的なら、必ず詳しい人に見てもらうのがベストです。食用きのこでも軽い毒を持つものが多く、火を加えることで毒は分解されて安全な食物になります。

また、きのこは放射性物質をよく吸収するという事も付け加えておきましょう。

(山口龍治)



(鈴木若菜・北小4年)



“中禅寺湖を歩いた”

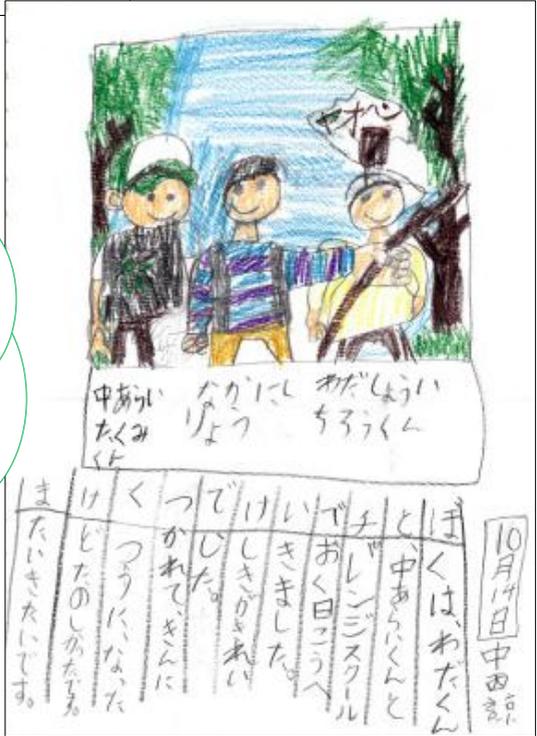
(佐々木真澄・年長)

豊富なきのこを採って集めたり、虫にさわったり、おとなも子どもも道草三味の道中は、学校の遠足では味わえない楽しさがいろいろ。でも国立公園内は原則として採集禁止なので、控えめにね…

(中西 諒・北小2年)



(和田翔一朗・北小2年)



(登山休憩中、木の幹に)枝でつついたり枝を削ったりした自然遊びが楽しかった。高山頂上に着いて山に登れたのが良かった。(亀山義宗・北小6年)

丸1日歩き、体が元気になりました。モミジの種類の違いや、葉の観察の見方などを教わりました。忘れないで覚えてたいです。(亀山千尋・保護者)

山口さんの自然講座・3

山中で見た毒のある昆虫

ハイキング中に、だれが見つけたのか、地面を這う甲虫がいて、何人かが写真を撮っていました。阿部隊長は、毒だから触るなど注意しました。

この昆虫は、ツチハンショウ科のヒメツチハンショウです。手で掴むと、すぐに黄色い液体を出します。この液体はカンタリジンを含んでいて、すぐに洗い落とさないと、やがてヤケドをしたような水腫れ状の皮フ炎をおこし、ヒリヒリした痛みを伴います。この仲間はマメハンショウなど日本には15種類います。アオバアリガタハネカクシやアオカミキリモドキ、それにイヤな臭いを出すカメムシ類にも同じような被害を受けます。

ハンショウ科の甲虫はこのような被害はありません。ハンショウはとても美しい甲虫ですが、肉食性で噛み付きます。

他に刺す昆虫も多く、虫好きの子供さんは、これらの危険な虫もよくべんきょうしましょう。山と溪谷社刊の『野外毒本』には、毒のある動植物とその被害例も書かれていて、一読する価値があります。(山口龍治)

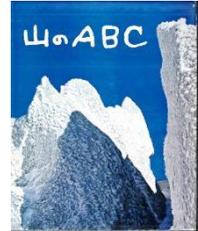


ツチハンショウ



ディーゼル列車に乗って、烏山線沿線、秋の小さな旅
～烏山、龍門の滝～太平寺～愛宕台～八雲神社～毘沙門山～烏山城跡～

木々はその葉を落す前に、こんなに美しい色を見せる。もう要らなくなった筈のものが、どうしてこんなに美しいのだろうか。私はある秋の谷を、何も目的もなしに歩いていた。もみじのドームの中にいさえすれば、私は余計なことを考えずにすんだ。明るいきれいな光の中で、たとえ私がどんなに気のきいたことを考えたとしてもそれは大概余計なことになってしまったろう。私はそれよりも、出来る限りゆっくり歩いて見物をした。



『山のABC』(昭和34年12月25日・創文社発行)より「もみじ」串田孫一

栃木・茨城県境には八溝山から筑波山に続く八溝山地が広がっています。去年は真岡鉄道のSLに乗車してその山々の麓を走り、里山や棚田を見てくることができました。今回は、烏山線のディーゼルカーを利用して八溝山地の一端に入り、おそらく里山においてきた紅葉を楽しみながら、龍門ノ滝、太平寺、八雲神社、烏山城跡等を見学したいと思います。お誘い合わせの上、ご参加ください。

日 時：11月11日(日) AM6:00 JR鹿沼駅集合

行 程：JR鹿沼駅—(日光線)—JR宇都宮駅—(烏山線)—JR滝駅—太平寺—龍門ノ滝—愛宕台公園—八雲神社—毘沙門山(199.4m)—烏山城跡(城跡一周)—JR烏山駅—(烏山線)—JR宇都宮駅—(日光線)—JR鹿沼駅

服 装：長袖シャツ、長ズボン、防寒着(セーター、ジャンパー)、帽子、手袋、軽登山靴または運動靴

持ち物：リュックサック、ポット、レジャーシート、雨具、弁当、おやつ、お手ふき、タオル、ちり紙、レジ袋、筆記用具

あると便利な物：双眼鏡、ルーペ、カメラ、

参考書「栃木県の歴史散歩」（山川出版社）

「近世栃木の城と陣屋」「栃木の山140」（随想舎）

「とちぎの社寺散歩」「栃木の日帰りハイキング」（下野新聞社）

1/25,000 地形図は「烏山」

費用：JR乗車券代（おとな 820円×2、子ども 410円×2）

今年度初参加の方は年間保険料 800円

問合せ：自然観察クラブ 阿部（090-1884-3774）



☺ 会員からのおたより ☺

魚釣り教室に参加して

ぼくは、8月19日が来るのをとても楽しみにしていました。

それは、魚釣り教室があったからです。

前の日は、バケツやD型のあみ、くつ、飲み物などを用意して、釣りにそなえました。

当日は、天気が良く、黒川の水の量もちょうどで、流れがとてもきれいでした。

あみでは、なにかのち魚や、時おりカジカが取れました。

ギーコン釣りでは、雑魚やカワムツなどが取れ、黒川には、思った以上に、たくさんの種類の魚がいることが分かりました。

友だちも参加していたので、とても楽しく釣りに参加できました。鹿沼学舎の方や、阿部さんにもたくさんお世話になってとても良い一日になりました。

（穂本英憲・北小5年）



※ 皆様の投稿をお待ちしています。

続・ウナギ

僕がこれから書くことを、多くの人は信じるできないであろう。書いている僕自身、2012年11月1日に起きたことを信じるできないし、明日の朝、目が覚めれば、これが夢であったことに気が付くのであろうと思っている。

月報第5号の巻末に、僕は、「ウナギは1年ぶりに脱走を試み、帰らぬ人となりました。」と書いた。黒川水族館が終盤間近となった8月末、僕の姉の夫とその孫2人が水族館を見に来た。僕は見易いようにと、水槽用の蛍光灯にスイッチを入れた。電灯で明るくするとウナギは嫌がって砂にもぐろうとするが、砂は浅くて頭だけもぐることさえできない。明かりはウナギにとって相当負担になるのである。それにもかかわらず僕はその明かりを消すのを忘れてしまった。次の日の朝、物置に行ってみると、電灯がつけっ放しになっていて、ウナギはいなかった。ターボファンの風を当てるために開いていた隙間から長い首を伸ばして逃げて行ったのである。物置小屋の前には1坪ほどの池があり、カメがいるのでいつも水を少しずつ流している。また物置小屋の脇には、上流に行けば星宮神社、下流に行けばいつか黒川に合流する用水路が流れている。念のため池の中を覗いてみたがいない。途方に暮れながら、ウナギは今ごろ黒川の大きな石の下に隠れているのだらう、と考えた。もちろん、水槽の浅い砂もかっばいてウナギがいないのを確認し、ポンプのコンセントを抜いた。ただ、これは単に面倒なために、水槽の掃除はせずに、水も抜かずにそのままにしておいたのである。

その日から6年生の娘は、時々、「お父さん、ウナギ見つけた?」と訊くのである。前のように、1日くらいなら物置の中において、助かることもあるかもしれない。しかし川に逃げてしまった(かも知れない)ウナギをどうやって見つけることができるのか。それが何日たっても同じ質問をするのである。ただ僕自身、物置に行くたびに、明かりをつけてウナギの水槽を見る習慣になっていたのも事実である。

そして11月1日、たぶん仕事で使う材料を取りに行ったときだと思う。いつものように明かりをつけて物置の周りに並べてある水槽を見回した。するとウナギの逃げた水槽

(次ページへ続く)

の中に、なんとウナギがいる。もちろん、ポンプは回っていない。僕は自分の目を疑った。とりあえずすぐポンプをコンセントにつないだ。

これが、ウナギが逃げて、帰ってくるまでの顛末である。物置の前にある池は、1坪ほどの四角い池で、深さは80cmくらい。西側にもう一つ、1.5mくらい離れて小さな浅い池があって、側溝のような水路でつながっている。今はカメを飼うために大きな池の底から20cmの高さのところにある排水口を開けてあるので浅くなっている。小さな池にいつも井戸水をチョロチョロ流しているの、水路にはいつも水が流れているが、大きな池に落ちる前に5cmくらいの堰堤を設けてあり、水路にはある程度の水がたまっている。冬の井戸水は暖かいのでカメはここで冬眠することもできる。水路部には重いコンクリートのふたが置いてあり、薄暗い。ウナギはたぶんここにいたのだと思う。しかし、もし大きな池に降りれば直径5cmの排水口に入って川に逃げることができる。もちろん囲いのある池に入るより、物置の隣に流れている用水路に行く方がウナギにとっても容易なはずなのだが。

もしかすると用水路に入ってみたが、水が汚いと察して井戸水の流れている池の水路に落ち着いたのかもしれない。川から、井戸水のチョロチョロ流れてくる排水口にもぐり、いったん大きな池に入って、水路に登ったのかもしれない。しかしそれにしても、池にいたウナギが、元いた水槽に戻りたいと考えるものであろうか。そして池から上がってブロックの囲いを越え、物置に入って自分のいた水槽を選び、上に登ってたまたまサイズが小さかったガラスふたの隙間から入るだろうか

ウナギは2か月間どこにいたのか。もう一つ大きな可能性がある。そのカギはウナギが帰ってきたのが11月1日である、ということだ。10月は神無月である。全国の神々が出雲大社に集まるのである。もちろん、戸張町・星宮神社の神様もそうである。月報3号の「水の生き物観察会」の案内でふれたように星宮神社の神様の乗り馬はウナギである。たぶんこの神様は出雲大社に詣でるにもウナギに乗って行くのだろう。余談だが、星宮神社の神様が乗り馬にウナギを選んだというのは、ウナギが持っている、川にいる魚の中で最も秀でた能力を買ったからであろう。魚なのに水槽から逃げ出して地面を歩く、というのもそうだが、今回の出来事で、その能力が想像以上のものであることがわかったのである。

(次ページへ続く)

さて、8月末、神様は出雲大社に詣でるため準備にとりかかったが、この辺りの用水路に今はウナギがいない。それはここ数十年続いていたことではあるが。ただ今年と同じ町内の水族館にウナギが飼われているらしい。そんなわけでうちのウナギは召集命令を受け、水槽を脱走して用水路に入り、上流に泳いで星宮神社に行き、1か月の準備の後、神様を乗せて出雲大社に詣でたのである。そして霜月となった11月1日、無事に水族館に帰ってくる事ができた、というわけだ。帰ってきたウナギを、ぜひご覧ください。 (黒川水族館・阿部良司)



鹿沼の自然・栃木の旅 月報第7号

2012年11月1日発行

北光・自然観察クラブ

鹿沼市上田町 1923

発行人 阿部 良司

年会費 1200円

ホームページでもご覧になれます→

クリーニングハウスあべ

